

神奈川からがんをなくす会(ACクラブ)

総 括

多少の増減はあるがこの数年は会員数250-260名を保っている。即ち年間の新入会員数は昨20年度は7名であった。従って表1のように総数262名で男性142名、女性120名。男性では肺、消化器の組合せが最も多く、肺単独は24名である。女性では消化器、子宮、乳房の組合せが最も多く80名、次いで以上の三項目に肺を加えた組合せが続いて23名、肺単独は3名で格段に少ない。

年齢別では70歳代が最多で114名、60歳代は78名、50歳代は40名、80歳以上は26名を数える。本年度は胃、大腸、肺、乳房、子宮の各項目にて最終的にがんと診断されたものはなかった。絶対数が少ないとはいえ当クラブの利点は一人一人の個人に対して注意が行き届くので精検受診者率は常に100%に近い。

消化器がん検診

平成21年度に消化器がん検診を受診したのは229名(男118名、女111名)であった。このうち胃がん検診としてX線検査または内視鏡検査を受けたのは182名(男96名、女86名)で、119名(65%)は異常なしで、胃ポリープ14名(7.7%)、潰瘍系疾患13名(7.1%)、その他の良性所見27名(14.8%)が発見され、胃がんはなかった。

腹部超音波検査を受けたのは213名(男109名、女104名)で、肝臓、胆のう、膵臓、腎臓のがんは発見されなかった。

大腸がん検診として免疫学的便潜血検査を受けたのは213名(男111名、女102名)で、うち9名(4.2%)が要精検(便潜血陽性)で、二次精密検査の全大腸内視鏡検査を医療機関で受けるよう受診勧奨をした。大腸ポリープ、大腸がんの発見はなかった。

肺がん検診

本会の発足時は検診項目を胃と肺としていた。検診の歴史的な道どりをみても胃はすでに検診としての名声を得ていたのであるが肺についてはとくに肺がんのみを目的と謳った検診はなかったためにこれを目的として入会した会員が多く胃対肺では1:1.5の割で胃を上回っていた。その後ACクラブと改変し子宮がん・乳がんをも標的とする検診とした多様性をアピールしたために本年度会員262名のうち肺のみは27名と10%である。最も多いのは消化器(胃と大腸)との組合せで118名、全体の約50%である。

精検受診者は7例で要精検者数と同数である。そのうち5例がCTによる検査を受診している(表6)。

喀痰細胞診では“D”判定は0、E判定に1名があるが本例は昨年度発見の坦がん例(治療及び経過観察中)からの所見である(表7)。

乳がん検診

乳がん検診は平成17年より担当者が変わり、検診方法も視触診にマンモグラフィ(以下MMG)3方向併用毎年より、現代の標準より更に精度を上げ年齢に関係なく、隔年2方向(MLO、CC)、その間超音波(以下US)を挟む方法を原則とするように変更した。毎年3方向はあまり有効性がなく、またX線被曝も多く、それまでも問題視されたMMG高濃度者に不適であるので、精度が急速に進歩発展してきた超音波を隔年に挟む方法が両者の欠点を互いに補いより合理的と考えたためである。無論年齢、MMG撮影結果を考慮して適宜変更している。

MMGは担当者が読影し、読影有資格者によってダブルチェックされ、USは担当者自身が行っている。受診者は96名とほぼ同じで、ほとんどがリピーターなので発見乳がんはない。年齢層が高く、クーポン券等一般の乳検の機会が高まっているので、ACクラブでの乳検の存在意義に疑問が残る。

子宮がん検診

ACクラブ会員女性で平成21年度受診された120名(前年度131名)中、子宮頸がん検診受診者は85名(70.8%)、続いて体がん検診も受けられた方は74名(61.7%)であった。

頸部細胞診で要再検と判定された方が3名、要精検者はなかった。体部細胞診では要再検・要精検と判定された方はなかった。

頸部細胞診で要再検と判定された3名のうち、2名は再検の結果異常なく、1名は追跡途中である。

昨年度年報で希望的提案として記述したhybrid capture II(HC II・高リスク型HPVを一括して検出する方法)が当協会に於ても平成23年度から子宮頸がん検診項目として導入することが承認された。子宮頸がん検診の方法が新知見のもとで大きく変わろうとしている現在、ACクラブ会員の方々のご理解のもとで普及することが期待される。

関係の集計表は111頁に掲載